日本語教育研修会（2013.1～2013.12）講演要旨

ルーマニアにおける日本語教育の課題

―学習者のニーズを中心として―

Anca Focseneanu（ルーマニア、ブカレスト大学准教授）

本講演では、ルーマニアにおける日本語教育の状況および日本語学習者のニーズについて述べた。

ルーマニアにおける日本語教育の特徴として、まず挙げられるのが学習者の数が増えつつあることと、日本語教師の殆どが非母語話者であることである。

学習者のニーズを把握するために2012年10月3日にルーマニアの日本語教育・日本研究の中心となっているブカレスト大学日本語学科の学生を対象にアンケートを行った。回答者は新一年生全員（女性34人、男性10人）だった。「日本の何に一番興味がありますか」という質問に対し、最も多かった回答は「日本語そのもの」(36人)、「日本文化」(33人)だったことからも分かるように、ルーマニアの学習者は将来の仕事などを目指すよりも、日本語を学びながらその背景にある文化も味わって、日本語の学習によって、あるタイプの人生の充実感を目指していることが言えるだろう。

日本語学習者辞典における外来語の位置づけ

Anca Focseneanu（ルーマニア、ブカレスト大学准教授）

本講演では、外来語が日本語学習者辞典においてどう位置づけられるかを、言語理論及び辞書学や語学教育の視点から述べた。

この話題に興味を持ち始めた理由は、日本語及び日本語言語学の授業で外来語の説明・例を導入すると、学生は楽しく興味深く聞いてくれることに気付いたからである。また外来語を導入すると、カタカナの練習、日本文化の知識なども伝えられるので、勉強が多くできる話題である。学習者はすぐに使いたい外来語は若者言葉における外来語、略語（メーリス）と母国の文化のものを表す外来語（ドラキュラなど）である。

しかし日本語教材に出てくる外来語は非常に乏しい。ブカレスト大学日本語学科の学生を対象に行ったアンケートで分かったのは学生のすぐ思い浮かべる外来語は「アニメ、ホテル、テレビ」とか「パソコン、インターネット、リサイクル」のようなものしかないことである。

結論は学習者のニーズに応えるために最も便利な外来語を調べ、学習者辞典には多く入れる必要があるということである。

留学生のための日本語の発音指導について

松崎　寛（筑波大学人文社会系准教授）

従来の発音指導では、「母語の干渉」が必要以上に強調される感が強いが、現実には、一教室に様々な学習者が混在する状況も多く、また、同じ母語話者でも、学習者の方言差、個人差がある。そもそも、誤用の原因を干渉と断定することで、指導法が180度変わるわけでもない。

学習者の母語によらず習得困難なのは韻律であり、自然な発音の評価に大きく影響するのは、特に高さである。高さに関する視覚的補助を指導時に与えれば、意識化に役立つが、ただ見せるだけでは発音は良くならない。大切なのは、学習者が韻律の諸規則を獲得できるよう、わかりやすく提出していくことである。そこで、河野・串田・築地・松崎（2004）は、韻律指導教材『1日10分の発音練習』（くろしお出版）を開発した。これは、「「大から小」＝「易から難」で体系的に学習」「アクセントは一語一語覚えるのではなく、用言・複合語のルールで処理」「練習は聞き取り優先」という3大コンセプトに基づき、イントネーションとアクセントの関係、アクセント規則、リズム等が順を追って理解できるように構成された教材である（http://www.u.tsukuba.ac.jp/~matsuzaki.hiroshi.fp/pg.html）。

講演当日は、様々な実践報告や習得研究について紹介し、中国人をはじめとする留学生に対し、どのように発音指導を行えば良いかについて議論した。

講義の「談話型」の表現と理解

佐久間　まゆみ（早稲田大学国際学術院教授）

留学生受け入れ30万人計画により、大学学部留学生の日本語の講義理解力が喫緊の課題とされるが、早稲田大学「文章・談話研究会（WTDK）」の過去10年余の共同研究の一環として、講義の「談話型」の表現と受講者の理解の実態について報告した。「談話型」とは、談話の全体的構造を示す6種の類型であるが、今回は、講義の終了部に「中心段」の位置する「尾括型」の講義Aの大学生と留学生の3種の理解調査（①受講ノート②要約文③インタビュー）の結果を中心に、具体例を示しつつ、それぞれの特徴と今後の課題を述べた。

佐久間編著（2001）『講義の談話の表現と理解』（くろしお出版）に、人文学系12講義の談話型は、「中括型」が最多で8例、「尾括型」「両括型」各2例の3種で、各種表現特性が認められた。一方、講義A（尾括型）とB（中括型）に関する日本語母語話者の大学生対象の2種の理解調査（①受講ノート②要約文）の結果は、②要約文の理解類型は原話の尾括型を示す主題文と中心文が有意に多く残存するが、要約率2％のため、開始部に主題文を示す「頭括型」の表現類型が多いという結果的理解を示していた。①受講ノートも、理解類型は同様だが、表現類型は講義の「話段」の展開に沿った過程的理解を示していた。

なお、③インタビュー調査を加えた新たな講義理解調査で、大学生の要点説明は講義の各種展開表現によるが、留学生はその理解と表現に問題のあることが明らかになった。

留学生の母語表記を日本語教育に生かしてみよう

アンドレイ・ベケシュ（リュブリャーナ大学文学部教授）

日本への留学希望者を含めて、長期滞在者が増えつつある今、日本語を習得する必要がある者も増加しつつある。その中で、非漢字圏の、特に初級の学習者にとって、日本語表記体系は、複雑な表語・表音文字の混種的体系であるため、学習において大きな負担となり、しばしば日本語学習へのモチベーションを損ねる原因となる。

ただし、複雑な内部構成の表記体系を持っているのは日本語だけではない。表記の原理から見て、非漢字圏の言語も、多かれ少なかれ、日本語表記体系と類似するような原理に基づく表記体系を持っているものが多いのである。即ち、現在用いられているほぼ全ての言語の表記体系において用いられている表記記号のタイプもその用法も多様であるということである。例えば、主としてアルファベット文字を用いる言語でも数字や単語の分かち書きは漢字の表語的用法と同じ原理に基づく。一表記素が一音節を表す、いわゆるアブギダというタイプの文字を持つ言語も、エチオピアからカンボジアまで、非常に多い。

発表者は、本国や筑波大学留学生センターで初級学習者を対象に表記を教えた経験に基づき、学習者がそれぞれ身近に知っている自分の母語の表記体系と日本語の表記体系の様々な類似点を説明に用いた。それにより、学習者は様々な不安、不理解、誤解などのハードルがかなりの程度克服可能になり、モチベーションも維持できるようになった。